

山形大学附属特別支援学校
教諭 阿部 友幸

1 単元名 「みんなが喜ぶ仕事Ⅱ ～自分の力を高め、清掃で地域を幸せにする～」

2 単元の目標

- ・ 使用する清掃用具の特性や扱い方及び地域を清掃することの意義を理解し、作業の確実性や持続性、巧緻性等を高める。 (知識・技能)
- ・ 清掃の技術に込められた工夫や、自分たちが地域のためにできることについて考え、作業のやり方を工夫する。 (思考・判断・表現)
- ・ よりよい地域社会への貢献に向けて、自分が清掃を通してできることを進んで実践しようとする。 (主体的に学習に取り組む態度)

3 単元について

(1) 教材観

本単元は、地域のコミュニティセンターの清掃を軸としながら、地域の専門家からの指導を生かして生徒が自らの清掃技術を高め、地域貢献する実感を得て、価値観や行動の変革を促す学習である。

本校は山形市蔵王地区にある特別支援学校で、地区内には山形市蔵王コミュニティセンターがある。山形市蔵王コミュニティセンターでは職員が常駐し、地域住民がサークル活動等様々な取り組みを行っている。日常的な清掃としては常駐職員が毎日行う簡易清掃の他、年10回ほどのサークル連絡会による清掃があるが、隅々までの清掃や窓ふきなどは十分に行えていない状況である。また、本校高等部作業学習のクリーングループは前年度に立ち上げたばかりであり、前年度は校内清掃を中心に行い、山形市蔵王コミュニティセンターへも冬期に数回清掃に行くにとどまっていたが、今年度の本単元から2カ月に1回程度の定期的な地域清掃を行う。

扱う清掃用具として、初めは前単元の学習を生かして乾式モップやほうき、タオルといった基本的なもののから使い始め、生徒の思考に沿い、地域のニーズに対応する形で水モップや掃除機といった用具を追加する。その際、一般社団法人山形県ビルメンテナンス協会の協力を得て、生徒が専門家の方から清掃用具の使い方や清掃の意義等について直接指導を受ける。

このように、地域の方々とかかわりながら清掃活動を行うことで、自分たちの技術の向上と地域貢献を実感し、それによって自らも幸福感を得て、地域のために自分の力を発揮したいという価値観や行動の変革につながると考えている。

(2) 生徒観

本校は知的障がいのある児童生徒が学ぶ学校であり、高等部作業学習のクリーングループには1年生2名、2年生3名、3年生2名の計7名が所属している。教師の手本を見て自分のすることが分かると自分から作業を進めたり、自分の考えを仲間に伝えて協力したりできる生徒が多い。その一方で、指導やアドバイスを受け入れたり集団で行動したりすることが難しい生徒もあり、常に個別の対応が必要な生徒も1名いる。

清掃技術に関しては、昨年度から続けてクリーングループで活動している2年生の2名は年度当初から自在ほうきや乾式モップ、タオルの基本的な使い方が身に付いている。

また、他の生徒も1学期から校内清掃で技術を磨いたり、7月に「アビリンピックやまがた2024」のビルクリーニング（初級）という種目に参加したりしたことで、乾式モップやタオルの基本的な使い方が身に付いてきている。しかし、水モップや掃除機など他の清掃用具については校内外の清掃で使用する機会が少ないことから、基本的な使い方が身に付いていない状態である。

また、地域の施設を清掃する意義に関しては、「地域の人喜んでくれる」といった発言をする生徒もいるものの、清掃を通して自分や周りの人にどのような影響があるのか具体的にイメージできていない様子が見られた。

（３）指導観

第一次では、昨年度から地域の施設を清掃していたことに触れつつ、「どうして蔵王コミュニティセンターに清掃に行くのでしょうか。」と問い掛ける。その際、1学期の「アビリンピックやまがた2024」に同じく参加しており、清掃技術の高い近隣の高等養護学校の生徒も地域の清掃をしていることに触れることで、地域の清掃が地域住民だけでなく生徒自身へも影響があることに気付けるようにする。また、生徒自身が相手意識をもって自主的に活動に参加できるように、山形市蔵王コミュニティセンターには生徒自らが電話で連絡し、清掃の日時確認と、施設概要説明の依頼を行うようにする。1回目の地域清掃は、前期に扱ったことのある清掃用具で多目的ホールを清掃し、自分たちの力できれいにできた実感を得て、喜んでくれる相手の顔や名前を意識できるようにしたい。

第二次では、2回目の地域清掃として、前回の清掃の成果と課題を生かしつつ、同じ清掃用具を用いて会議室や施設の外の窓等を清掃する。その際、職員の方から「次回は水拭きや掃除機を使った清掃をしてもらえると嬉しい。」ということ述べてもらい、教師から「地域のために私たちの清掃の力でできることはあるのでしょうか。」と問い掛ける。そうすることで、生徒が水モップや掃除機を使用できるようになりたいと自ら望み、専門家から清掃用具の使用方を教わって地域の人役に立ちたいという発想につながると考えられる。そして、一般社団法人山形県ビルメンテナンス協会の方から清掃用具の使用法のレクチャーを受けたり、地域を清掃する意義等について質疑応答をしたりする。なお、水モップと掃除機は前述のアビリンピックにおける種目「ビルクリーニング」でも使用する用具であり、来年度の参加に向けて生徒の意欲を高めることも期待できる。

第三次では、3回目の清掃として調理室と会議室の清掃を行う。新たに学んだ水モップと掃除機を使用してやり遂げることで、自らの清掃技術の向上や地域の人役に立てた喜びを実感できると考えられる。また、単元のまとめでは、これまでの活動を振り返りながら3学期に地域のためにどんなことをしたいか意見を交わす場を設ける。2月にも蔵王コミュニティセンターでの清掃を予定しているため、これまでの成果や課題から、次回清掃したい場所や、それに向けて向上させたい技術などについて考えられるようにする。

このように、地域の一員としての公共施設の清掃活動や、施設職員や利用者等との交流の継続を通じて、清掃によって施設の衛生面を維持して建物の持続性を高めたり、地域の方に感謝されたりするといった社会への影響に気づき、持続可能な社会づくりに参画していく態度を養っていききたい。

（４）ESDとの関連

・本学習で働かせるESDの視点（見方・考え方）

相互性：学校も地域の一員であり、地域の様々な人たちとの関わりの中で存在して

いる。私たちが地域で行う清掃活動も、地域貢献の一環である。

責任性：私たち一人一人が地域の一員であることを自覚し、地域のために自分ができる役割について考えて最後まで取り組む。

・ 本学習で育てたい E S D の資質・能力

未来像を予測して計画を立てる力

地域に出向いての清掃活動を軸に、どのように自分たちの清掃の技術を高めるか計画し、実践する。

つながりを尊重する態度

学校のある蔵王地区の方々と自分とのつながりに関心をもち、蔵王地区の方々のために自分ができることを考える。

・ 本学習で変容を促す E S D の価値観

世代内の公正

地域のあらゆる人たちが利用しやすい施設の維持に努めることが大切である。

幸福感に敏感になり、それを大切にする

清掃が自分や誰かの喜びになることに気づき、自分の幸福感につながる。

・ 達成が期待される S D G s

1 1 住み続けられるまちづくりを

4 単元の評価規準

ア 知識・技能	イ 思考・判断・表現	ウ 主体的に学習に取り組む態度
① 水モップと掃除機の特 性や扱い方、地域の清 掃が自分や周りに与え る影響について理解し ている。	① 水モップと掃除機の扱 い方に込められた工夫 について考え、自分の 言葉で表現したり、清 掃の仕方を工夫したり している。	① 決められた清掃の手順 を守るだけでなく、清 掃箇所がきれいになる ようにできることをや ろうとする。
② 時間いっぱい作業に取 組み、掃き残しや拭き 残しなく丁寧に清掃し ている。	② 自分たちが地域のため にできることについて 考え、自分の言葉で表 現している。	② これまでの清掃の振り 返りや専門家の指導を 生かして清掃しようと している。

5 単元展開の概要（全 5 9 時間）

次	学習活動	○学習への支援	評価(△) 備考(・)
第 一 次	1 蔵王コミュニティセンターを 清掃することについて知る。 ・清掃すると、地域の人が喜んで くれそう。 ・どんな施設か知りたい。 2 校内清掃で乾式モップやタオ ル等の使用技術を磨く。 ・隙間なく清掃したい。	○施設の概要と活動の見通しが 分かるように、昨年度の活動 写真を提示したり、施設のホ ームページを閲覧したりす る。 ○清掃用具の基本的な使い方が 分かるように、個別に必要な 指導を行う。	

	3 地域清掃（１回目）と、所長の講話（施設について） 清掃用具：乾式モップやタオル 清掃場所：多目的ホール ・地域の人が集まって施設を使っていることが分かった。 ・清掃が大変だけど、きれいになって喜んでもらえてよかった。 4 校内清掃でタオルや竹ぼうき等の使用技術を磨く。 ・コミュニティセンターで〇〇を掃除するから、練習がしたい。	○清掃場所の様子をよく見て清掃方法を工夫できるように、教師から言葉掛けを行う。 ○所長の話の内容が十分理解できるように、話を動画で撮影し、後日簡潔な言葉で視覚的に提示する。 ○目的意識を持って作業に取り組めるように、次回の地域清掃の場所や道具を視覚的に提示する。	△ア② △ウ①
第二次	5 地域清掃（２回目） 清掃用具：竹ぼうきやタオル 清掃場所：施設周辺や会議室 ・練習した竹ぼうきで落ち葉をきれいにできてよかった。 ・水モップや掃除機を扱えるようになりたいから、詳しい人に教えてもらいたい。 6 山形県ビルメンテナンス協会の方による指導を受ける。 ・この道具は～だからこのような使い方をすると分かった。 ・清掃をすると、どんな良いことがあるか分かった。 7 校内清掃で水モップや掃除機の基本的な使用技術を身に付ける。（調理室や校長室） ・新しい清掃用具が使えるようになると、できる仕事が増えて嬉しい。	○前回の地域清掃の成果や課題を生かせるように、事前に清掃のポイントを自分の言葉で整理する時間を設ける。 ○以降の活動の方針を意識できるように、施設職員から「水拭きや掃除機もしてもらえると嬉しい」と話をしてもらう。 ○生徒が専門家の指導を十分理解できるように、事前打ち合わせで生徒に伝えてほしいことを簡潔な言葉で共有したり、個別指導の時間を設けたりする。 ○清掃用具の使用方法を振り返れるように、専門家の指導の要点をまとめた用紙をいつでも見られるようにする。	△ア② △ウ① △ア① △イ①

第三次	8 地域清掃（3回目） 清掃用具：水モップや掃除機 清掃場所：調理室や会議室 ・自分の清掃技術が高まった。 ・水モップや掃除機を使って、地域の人に喜んでもらえた。 ・もっとできることはあるかな。 	○清掃前後の違いが実感できるように、汚れの有無等について気付けるよう問い掛けたり、ゴミの量を見たりする。 ○清掃が地域の人に与える影響について理解できるように、施設職員や利用者から直接話をしてもらう。 	△イ② △ウ① △ウ②
	9 単元の振り返りをする。 ・地域の人に喜んでもらえるように次は～をきれいにしてみたい。	○清掃が地域の人に与えた影響について実感できるように、これまでの活動での地域の人たちの反応を振り返る。	

6 成果と課題

（1）成果

本実践では、作業学習のクリーングループの活動に、ESDの観点から地域清掃の意義の理解や地域貢献の実感につながる問いや経験を組み込んで学習を展開した。本実践における成果は主に三つある。

一つ目は、ESDの視点である相互性と責任性を働かせ、生徒が蔵王地区の一員であることを自覚し、自分の力を発揮して地域の人役に立ちたいと考えて行動できたことである。単元の初め、生徒たちは山形市蔵王コミュニティセンターの存在は知っていたが、自分たちの学校との関係性は認識していなかった。所長の講話を聴き、施設職員と定期的に顔を合わせながら地域清掃を行ったことで、自分たちも蔵王地区の一員であることが分かり、単元の振り返りでは「これからもみんなが喜ぶ場所を掃除していきたいです。」や「地域の人からお願いされたところは、どこでも清掃をしたいです。」など思いを述べる生徒もあり、ESDの資質・能力であるつながりを尊重する態度が身に付いたと考えられる。また、清掃のプロである山形県ビルメンテナンス協会の方から講習を受けたことも、生徒の清掃技術を高めるだけでなく、責任感を高める上で効果的であった。ある生徒は、2学期の終業式において、「〇〇さんに教わったことを、地域清掃で発揮できてよかった。」と感想を発表しており、自分の力を発揮して責任をもって地域清掃を行い、誰かの役に立てたことに達成感を得ている姿が見られた。また、ただ決められた工程に沿って清掃するだけではなく、カーペットの端の方はブラシを使ってゴミを取ったり、余った時間で窓拭きも行ったりするなど、地域の人のために何ができるか自分で考え、仲間と協力して清掃のやり方を工夫する姿が見られたことも大きな成果だと考えている。

二つ目は、ESDの価値観である「幸福感に敏感になり、それを大切にする」と関連し、生徒が清掃を通して誰かの役に立てたという喜びに加え、活動にやりがいを感じたり自信が付いたりして、様々な観点から幸福感を得るようになったことである。ある生徒は、山形県ビルメンテナンス協会の方との質疑応答で印象に残ったこととして、「（清掃をすると）きれいになって、自分もうれしいと言っていた。」と述べた。その生徒は、

単元の初めと終わりでの自分の変化について、「自分は掃除が苦手でしたが何回もやると楽しくなってきました。きれいになると心がうれしくなってきました。」と振り返っており、清掃による他者だけでなく自分への影響についても認識し、幸福を感じていることが伺えた。

三つ目は、本学習の清掃活動を通して、地域の方に学校の取組みを認知してもらい、校内の下級生にも私たちの学びをつなげられたことである。地域清掃の様子は、山形市蔵王コミュニティセンターが定期的に発行している広報誌で毎回紹介してもらい、蔵王地区の一員である私たちが施設を清掃したことを認知してもらった。そのことによって、地域清掃の際に地域の方から「いつもありがとうね。」などと声を掛けられることがあり、生徒たちもやりがいや達成感を得る姿が見られた。また、地元の新聞社の取材を受け、広く県内の方々に取組みを知っていただく契機になり、生徒たちのモチベーションも高まった。さらに、授業参観を兼ねた全校の学習発表会では、高等部として作業学習の取組みを発表し、一連の活動の流れについてスライドを使いながら発表した。小学部や中学部の児童生徒からも「地域の掃除をされていてすごかった。」や「掃除をやってみたい。」といった声上がり、クリーングループの生徒たちの地域で活躍する姿が、下級生の憧れとなったと考えられる。

(2) 課題

本実践では地域の施設を定期的に清掃し、施設職員の方との交流が深まった一方、地域を実際に利用しているサークルの方々などと触れ合う機会が限られており、「地域の人」として生徒が認知できる方が限られた。地域の方へのアンケート実施も検討したものの、施設の利用状況に依るところが大きく実施が難しかった。そこで、3回目の地域清掃のときに居合わせた施設利用者（地域の食生活推進委員の代表者）に直接話をしてもらった。「いつもは行き届かないところまできれいにしてもらって、とてもありがたい。ありがとう。」という話を聴き、生徒たちは大変やりがいを感じ、地域貢献の意義を実感した姿が見られた。このように、清掃が地域の方に与える影響について生徒が実感できるように、地域の方からの反応をどのように学習に組み込むか検討が必要である。

7 本単元を通した考察

【自らの力を高め、地域のために力を発揮するというサイクルの中で学びを深める】

本実践で扱った作業学習は、知的障がいのある児童生徒や複数の種類の障がいを併せ有する児童生徒を対象とした「各教科等を合わせた指導」という形態の一つである。特別支援学校高等部学習指導要領解説の「作業学習は、作業活動を学習活動の中心にしながら、生徒の働く意欲を培い、将来の職業生活や社会自立に必要な事柄を総合的に学習するものである。～（中略）～生徒の働く意欲を培いながら、将来の職業生活や社会自立に向けて基盤となる資質・能力を育むことができるようにしていくことが重要である。」という記載の通り、働く意欲を培うことが肝要である。また、名古屋（2018）は作業学習に必要な要素として「高い労働性」と「働く活動の継続性」を挙げており、「どのような作業展開をする場合でも、実社会の中での活動を基本とすること」や、「最低でも学校生活の一つのサイクルである四月から翌三月までの一年間は一定の作業に従事」することが重要であると述べている。以上のことから、1年間という長い期間で、学校内にとどまらず地域社会とつながって実際に働く活動を中心にした学習過程を仕組むことが必要となる。本実践では、この作業学習にESDの幸福感の視点を取り入れ、ESDの学習を工夫することで、成果にあげたような「持続可能な社会の創り手」として働く意欲を培うことができた。以下、その要因である学習展開の工夫について述べていく。

E S Dの学習過程については、大西（2021）が「問題解決型の学習過程を基本としている。」としており、その学習過程を「①導入により子どもの関心・意欲が高まる→②学習課題をつくる→③仮説をつくる→④仮説を確かめるための調査・実験→⑤調査や実験の結果をまとめる→⑥結果にもとづく話し合い活動→⑦一応の解決と発信・行動化」としている。

本実践では、抽象的な思考や長期記憶に難しさがある知的障がいのある生徒を対象に、E S Dの観点を取り入れて働く意欲を培うために、上記の学習過程を以下のように変更した。

①導入により子どもの関心・意欲が高まる→②学習課題をつくる→③課題達成のための校内での実践→④校外での実践（地域貢献）→⑤経験して分かったことや考えたことを伝え合い、まとめる→②③④⑤の繰り返し→⑥一応の解決と発信・行動化

実践の成果は6（1）で述べた通りであるが、生徒の変容の要因として、学習課題（ある清掃技術を身に付けて、地域清掃で活用する）をできるだけ簡潔な言葉で共有し、清掃技術を地域貢献につなげることを繰り返したことが挙げられる。ただ繰り返すのではなく、及川（2021）が述べる「探究的な学習ストーリー」の要素を加え、「子どもの疑問やニーズ、思考に寄り添った学習ストーリーを展開」したことが有効だったと考えられる。本実践では、施設職員から「水拭きや掃除機もしてもらえると嬉しい。」という話があったことを契機にして、生徒が清掃技術の向上の必要性を感じ、意欲的に専門家から指導を受けたり清掃活動に取り組んだりする姿が見られるようになった。

また、そのような学習ストーリーにはゲストティーチャーの活用も有効であった。清掃技術の指導に終始するのではなく、清掃の仕事を始めた理由ややりがい等について質疑応答する時間も設けたことで、ゲストティーチャーを清掃のプロとしてだけでなく、持続可能な社会の形成者として捉えて関わられるようにした。その結果、生徒は彼らに憧れ、教わったことを生かして誰かの役に立ちたいという思い、つまり働く意欲を培い、行動にも変容が見られた。

以上のことから、知的障がいのある児童生徒が「持続可能な社会の創り手」として働く意欲を培うためには、生徒の思考に沿いながら、作業能力向上と地域貢献を両輪とした学習ストーリーを展開することが重要であると考えられる。

参考文献

- ・文部科学省（2020）『特別支援学校学習指導要領解説 知的障害者教科等編（上）（高等部）』 株式会社ジアース教育新社
- ・名古屋恒彦（2018）『アップデート！各教科等を合わせた指導』 東洋館出版社
- ・奈良教育大学E S D書籍編集委員会（2021）『学校教育におけるS D G s・E S Dの理論と実践』 協同出版

※山形新聞朝刊 令和6年12月17日





現在の学年終了時に目指す姿

自分も地域の一員であることを自覚し、自分の力や他者のためにできることについて考えて、より良い社会の実現のために自分の力を高めたり、進んで行動したりしようとする。

誰かの役に立てるように、もっと働く力を高めたい。

作業学習「産業現場等における実習Ⅰ・Ⅱ」(職業・国語)

自分の関心がある事業所で2週間の実習を行い、目標達成に向けて力を発揮したり、進路について考えたりする。実際の仕事を通して、働く人に必要な作業能力や態度に気付いて向上心をもたせたい。

作業学習「みんなが喜ぶ仕事Ⅱ」(職業・国語)

○主に養いたいE S Dの資質・能力

未来像を予測して計画を立てる力

地域に出向いての清掃活動を軸に、どのように自分たちの清掃の技術を高めるか計画し、実践する。

つながりを尊重する態度

学校のある蔵王地区の方々と自分とのつながりに関心を持ち、蔵王地区の方々のために自分ができようことを考える。

○主に育てたいE S Dの価値観

世代内の公正

地域のあらゆる人たちが利用しやすい施設の維持に努めることが大切である。

幸福感に敏感になり、それを大切にする

清掃が自分や誰かの喜びになることに気付く、自分の幸福感につながる。

地域のために、人任せにせず自分にできることはしたい。

総合的な探究の時間「住みやすいまちづくり」

学校周辺を歩いたり、自治会長などから話を聴いたりして地域の課題に気付く、学校の児童生徒が地域のために持続的にできることについて考えて提案・実行する。(学校前バス停の清掃や落ち葉清掃など)

自立活動「因果関係・自己理解」 ※Aさんの場合

Aさんは苦手なことを認めて改善しようとしたり、自分の考えを整理して相手に伝えたりすることに難しさがある。そのため、自分の特性やなりたい姿について考え、教師との対話を通して活動目標や計画を自分の言葉で表現し、定期的に振り返りを行う。

家庭「家庭の役割と地域」

自分の家庭が、主に保護者による家事の分担によって支えられていることに気付く、自分にもできることや、求められることについて考えて実行する。また、地域も同じであり、幼児や高齢者の支援など、皆で支え合って行う必要がある。

自分にできることや難しいことが分かって、人に伝えられるようになりたい。

～できるようになるために、どう工夫したらいいかな。

家庭でも地域でも自分には役割があり、それを果たしたい。